＜前回：１．現代思想における「言語」の問い＞

１．現代思想・哲学とキリスト教思想・神学（相関関係）
　その中心に「言語」の問題が位置する。

２．森田雄三郎「現代神学の動向」1987 年（『現代神学はどこへ行くか』教文館、2005年）。「現代特有の歴史状況、とりわけ、急速に発展した今日の技術社会とその歪み」「システム化はいっそう細密化され加速され、これと連関して人間の精神運動と倫理生活も急速に様相を変えつつある」、「現代になってはじめて本格的な文字通りの世界史は始まった」、「人類全体の生存の根底を脅かす歪み」

「一九六〇年代に表面化したキリスト教内の神学運動は、人類の生活のこのような世界史的変化に対応する哲学運動と密接に関連している。」（33）

３．哲学と神学の相関関係は偶然ではない。神学の起源は哲学にある。

＊芦名定道「現代日本における宗教哲学の構築をめざして」
（京都大学キリスト教学研究室『キリスト教学研究室紀要』第 5 号、2017 年 3 月、pp.1-20）

「この古代ギリシャ哲学における宗教の主題化以降、哲学的思索は常に何らの仕方で宗教的テーマに関わってきたのであり、その意味で、哲学は宗教哲学を包括し、あるいは宗教哲学を思索の頂点としてきたと言わねばならない。キリスト教思想との関わりという点で注目すべき最初期の宗教哲学としては、まずプラトンとアリストテレスの哲学的思惟を挙げるべきであるが、ここでは、プラトン哲学が、まさに宗教哲学というべき内実を有しており、キリスト教思想における哲学と神学という問題領域と深く関わっている点についてのみ確認しておきたい。」

４．現代思想の動向
　言語論的転回（Linguistic Turn）からポスト近代

５．ポスト近代

＊芦名定道「ポスト近代とは何か――現代神学２（一九七〇年代～二〇一〇年代）」
　（『福音と世界』2016. 12、新教出版社）

「しかし、「近代」（前回説明）はさまざまなほころびを顕わにしつつも、基本的には未だ健在であり、現代神学もその総体においては、近代神学、近代キリスト教との連続性を堅持している。さきに述べた組織神学の危機も、実はポストモダンが主要な原因ではなく、むしろ近代自体の内部現象と解することも十分可能である。ティリッヒは、一九三〇年代にすでに、近代化プロセスの内部で、プロテスタントとカトリックの対立によって規定されたプロテスタント時代が過ぎようとしていると語った（「プロテスタント時代の終焉？」一九三七年。白水社刊『ティリッヒ著作集』第五巻、所収）。この「ポストプロテスタント時代」の到来は、近代化プロセスの内部における新しいフェイズというべきものであり（近代キリスト教のエキュメニカル・フェイズ）、いわゆるポストモダンという表現はこうしたものの一つの面を指示するに過ぎない。

６．歴史主義と反歴史主義と対立と再統合

・歴史主義／反歴史主義／両者の対立の克服＝統合

・フッサール現象学（前期の記述心理学と中期・イデーン期の超越論的現象学）と構造主義は、19 世紀の歴史主義へのアンチ・テーゼとして位置づけられる。

・構造主義からポスト構造主義へ

７．象徴論１／隠喩論／象徴論２

・「言語・非言語」→言語的要素→「言語からイメージへ」

８．Paul Ricoeur, *Interpretation Theory: Discourse and the Surplus of Meaning*,
The Texas Christian University Press, 1976.

3. Metaphor and Symbol

From Metaphor to Symbol

The Semantic Moment of a Symbol / The Non-Semantic Moment of a Symbol

Metaphor occurs in the already purified universe of the *logos*, while the symbol hisitates on the dividing line between *bios* and *logos*. It testifies to the primordial rootedness of Discourse in Life. It is born where force and form coincide.（59）

２．現代聖書学の動向：歴史・文学・思想

言葉の宗教としてのキリスト教　→　現代思想　→　聖書学

（１）近代的知と歴史主義

１．自然主義と歴史主義

近代的知の二つの動向（因果律の二つのタイプ）

作用連関と意味連関の組み合わせの諸パターン。

→　自然科学／精神科学、説明／理解

２．「近代」と人間的現実の歴史化

現実は永遠不変ではなく、変化する。人間の諸活動の集積、所産。

↓

近代歴史学、歴史的視点

「「近代化」の存在論的性格は《歴史化》と呼ばれるものであり、近代世界を貫いた社会変動は、メッサニーが言う「自然」からの「自由」という性格をもっていることに、われわれは注目せねばならない。つまりそれは「自然」から「自由」へという変化、「自由」の介入によって「自然」が「歴史」化する過程でもある。」（大木、上、47）

「四つの相における近代化」「①工業化、②都市化、③民主化、④情報化」（55-60）、「真理から情報へ、これは、真理の歴史化と言ってよい。真理は永遠ではない。」（58）

「近代化の深層構造」「①非魔術化・合理化」「②自由化としての近代化」（60-63）、「「コスモス」から「歴史」へという《歴史化》が、われわれの歴史神学の座となる。」（62）

３．「歴史主義」の多義性あるいは混乱

歴史主義という用語は、様々な視点から様々な意味を賦与させて使用されている。特に、ポパーとのほかの論者との相違。

「歴史主義」「その悪しき側面から完全に引き離され、人間とその文化や諸価値に関するあらゆるわれわれの思惟の根本的歴史化という意味において理解されねばならない」、「しかし、この歴史主義に対して、自然主義が同様に原理的かつ包括的な仕方で対立している」（トレルチ、諸問題・上、158）、「自然主義は、あらゆる質的なことや直接的経験を度外視する法則化の連関として、またそのようなものとして現実総体を包括する連関として理解されなければならない」、「自然主義と歴史主義とは、近代世界の二つの巨大な科学的創造であり、この意味においてそれらは、古代にも中世にも知られていないものであった」

(159)、「近代的思惟一般が持っている二つの本質的動機」(164)。

４．存在レベルにおける歴史・歴史化（存在論的概念）

・人間存在の歴史性

・聖書的な歴史的思惟（聖書の宗教が歴史的思惟であるという意味）

聖書的人格主義とギリシャ的存在論、動的歴史的と静的形而上学的、といった対比。

・近代化が歴史化であるという意味での歴史

↓

歴史・歴史化とはどのレベルにおけるいかなる現象・事態を意味しているのか。

５．知・人間的現実の地平としての歴史

倫理的なあるいは宗教的な価値・理想は､歴史的な形成物(歴史的な原因と結果の連鎖の中にあり、その意味はこの連関という全体の中で規定される)である。

cf. 自然法

↓

価値や理想の妥当性はそれが形成生成してきた歴史的連関（文脈）の範囲内に限定される。この限界を超えた普遍化は不可能あるいは間違っている。といった認識あるいは感覚。

相対性の意識＝歴史相対主義→ニヒリズム

「この時代の激動は、倫理学の崩壊をももたらした」(大木、1)、「相対主義の克服とは、相対主義が文化ニヒリズムへと転落する道とは逆の方向を模索することであり、崩落に身を委ねるのではなく上昇の意志をもつことである」、「今日の知的課題は、倫理学の建設である」、「相対的状況を十分知りながら、なお倫理学が倫理学として必然的に求めるべき普遍的な当為を探究する一つの企てがなされる。」(2)

「自然主義は無制限に、あらゆる生活のものすごい自然主義化と荒涼化へと導き、歴史主義はあの相対主義的懐疑に導く」、「歴史的なものの認識可能性と意味とに対する相対主義的な価値的懐疑であり疑惑である」、「これら悪い副次的な意味」、「歴史的素材を使いこなす文化総合へと向かう勇気をふるい起こす歴史哲学を求めている。」(トレルチ、165)

６．争点：ニヒリズムそして倫理学

決疑論か状況倫理か

７．Ｈ・Ｒ・ニーバー『啓示の意味』

８．抽象的な普遍主義・客観主義ではなく、具体性から出発し普遍性を展望する相互主観主義。→　経験の共有可能性と翻訳可能性を前提にして、他者との合意形成に努力する開かれた知性。批判的実在論。

９．知・人間的現実の地平としての歴史（歴史化）→歴史主義・歴史的思惟

倫理的なあるいは宗教的な価値・理想は､歴史的な形成物(歴史的な原因と結果の連鎖の中にあり、その意味はこの連関という全体の中で規定される)である。

（２）近代聖書学と近代的な「歴史」理解

１．近代的知・歴史主義に基づいたキリスト教思想（研究）＝近代聖書学の成立

近代世界（近代的な日常性）へのキリスト教の適応という歴史的動向において。

２．近代歴史学の成立→近代的知の基礎学としての歴史学

言語学、法学、哲学、神学、地質学、生物学など

・「十八世紀のいずれかの時点で、ドイツの大学、とりわけゲッティンゲン大学において、今までの単なる考証学から新しい科学的な方向、つまり、証拠となる史料の批判的検討と、出来事の成行を物語風に再構成することとを結合させるような方向に向かっての歴史学科の移行が始まった。この移行は、体系的でアカデミックな専門的研究としての歴史学の登場と密接にからみ合っていた。こうした変化と平行して、十九世紀に歴史研究が制度化されて専門的職業となってゆくにつれて、歴史家にとって一つのパラダイムが出現してきた。そして、このパラダイムが、ごく最近まで大学において執筆される歴史叙述に影響を及ぼし続けてきたのである。」（イッガース、13）

・「出来事の相互連関を把握できるような歴史学の手法を発展させようとした」（16）、「歴史学的＝文献学的方法と呼ばれることになるこの方法を使用した一つのモデル」（20）、「人間を取り扱う諸々の専門研究分野にとって解釈学的で歴史学的なアプローチの仕方が価値をもっていることを強調した」（21）。

３．18 世紀「新しい解釈学をめぐる対決」（シュトゥールマッハー）

「正統主義はただ、十八世紀における対決を決定的な仕方で規定した、啓蒙された合理主義あるいはピエティズムという二つの運動と結び付けている所でのみの、生き延びることができた」（180）、「対決の結果は、聖書の歴史的・批判的研究をもはや長いこと回避せず、遂行して、まさにそのことによって聖書の道を指し示す声を、新たに確かなものにするということに対して備えることである。この結果に啓蒙主義とピエティズムは等しく与った。プロテスタントが自分の土台の力を信頼して、この対決を回避しなかったことは、全体としてプロテスタントが誇ってよいことである。」（181）

４．トレルチ

「歴史的方法、歴史的思考法、歴史的感覚」「真の近代的歴史」

「第一は歴史批判にたいする原理的習熟であり、第二に類推の意味であり、第三はあらゆる歴史的事象間に生ずる連関がそれである。」（10）

「蓋然性の判断」（10）

「批判を始めて可能にする方法は、類推を適用すること」、「類推の全能とは、あらゆる歴史的出来事の原則的同質性を含むものである」、「聖書批評自体もまた諸伝承の類推によって成り立っている。」（11）

「歴史的生のあらゆる現象の相互作用」、「すべての出来事が恒常的な相互連関のなかにあり、全体も個体も互いに関連し一つの事象が他のものと関係しつつ、必然的に潮流を形づくることになるのである」、「われわれ自身の追体験能力」（12）

５．パネンベルク

・「トレルチによれば歴史的批判は、「すべての歴史的出来事の原理的同質性」を含む「類比の適用」に基づき、また、歴史的には普遍的な相関関係、「精神的・歴史的生のあらゆる現象の相互作用」があるという前提に基づいている。」（54）、「原理的同質性」、「あらゆる出来事は同質性を持つはずであるという要請」、「類比の持っている認識の力は、まさしく類比が非同質的なもののなかに同質的なものを見ることを教えるという点に基づく」（59）。

↓

方法論的現在中心主義＝歴史的思惟の解釈学的構造
制度的再帰性における歴史学・歴史研究

６．帰結：批判＝懐疑あるいは不可知論　→　Ａ・シュヴァイツァー、ブルトマン
・歴史的批判的方法：文献学＋歴史学→近代聖書学のパラダイム
・伝承史：イエス　→　断片的な口承伝承（弟子たち）　→　収集・文書化　→　編集
・現存のテキストから最古層へ遡及し再構成する。
弟子集団＝共同体における伝承の法則性の確定→逆算（様式批判：文学様式と「生活の座(Sitz im Leben)」との対応)、「生活の座」は真に社会的カテゴリーか？　ブルトマン『共観福音書伝承史』『イエス』、
「美的概念ではなく、社会学的概念」
しかし、文献学的操作の仮説の歴史的実体化？
Ｑ資料からＱ教団
・編集者の意図・神学の解明（編集批判）
・様式批判・編集批判から文学社会学（テキストと社会との相関関係・相互連関）へ。
そして、新しい新約研究の動向＝方法論の拡張・総合化（歴史的批判的方法を超えて）
・「歴史」、しかも狭い意味の「歴史」へテキストの意味を限定する結果。
「「科学的」学派は、史料の批判的検討を強調したにもかかわらず、歴史研究のイデオロギー的機能を弱めることに貢献しなかったばかりか、むしろ歴史研究が内政や外交上の目的のためにますます多く利用されるのを促進させたということなのである」（イッガース、26)、「歴史主義の解釈学的な方式は、社会主義批判にうってつけであった」(27)、「国家的な公文書から読みとれるような国民国家の歴史」(40)。
↓
民衆史、心性史（アナール学派）
土肥昭夫『日本プロテスタント・キリスト教史論』教文館、1987 年。

（３）反歴史主義と聖書学の新展開

１．近代聖書学的な「イエスの譬え」研究
Rudolf Bultmann, *Die Geschichte der synoptischen Tradition*, Göttingen 1979（1921）
C.H.Dodd,　*The Parable of the Kingdom*, New York　1961（1935）
Joachim Jeremias, *Die Gleichnisse Jesu*, Göttingen　1984（1947）
20 世紀中頃の譬え研究は、聖書学全体の動向を反映して、ユリヒャーの示した議論の内の歴史性の議論の線上で展開してきた。
・歴史性への過度の集中、歴史への偏重
文学的言語的な分類の問題は歴史的社会学的問題設定に従属している。
・エレミアス：新約聖書テキストはもっぱらその歴史的原初形態（イエス自身の言葉）の再構成のための資料として理解されている。
２．1960 年代頃から、文学性の復権、反歴史主義
構造主義的譬え解釈
文学性と歴史性とのバランスの回復から思想へ

↓

解釈学的プロセスに基づく譬え解釈

これは歴史概念と言語概念との本格的な問い直しを要求する。

80 年代リクールの意味

Eta Linneman, *Gleichnisse Jesu*, Göttingen 1978（1961）

Eberhard Jüngel, *Paulus und Jesus*, Tübingen 1979（1962）

Robert W. Funk, *Language, Hermeneutic, and Word of God,* New York　1966

Parables and Presence, Fortress 1982

The Good Samaritan as Metaphor

Dan Otto Via, *The Parables.Their Lirerary and Existtential Dimension,* Fortress 1967

John Diminic Crossan, *In Parable. The Challenge for the Historical Jesus*, New York　1973

Amos N. Wilder, An Experimental Journal for Biblical Criticism.

An Introduction,in: *Semeia* 1,　1974

, *Jesus' Parables and the War of Myths*, Fortress　　1982

Norman Perin, *Jesus and the Language of the Kingdom*, Fortress　1980（1976）

Daniel Patte, *What is Structural Exegesis ?*, Fortress　1976

Paul Ricoeur, The Language of Faith / Listening to the Parables of Jesus,in: Charles E. Reagan and David Stewart（eds.）, The Philosophy of Paul Ricoeur, Beacon Press　1978

Gerhard Sellin, Allegorie und Gleichnis,in: ZThK 75　1978

Aurel von Jüchen, *Die Kampfgleichnisse Jesu*, München　1981

Wolfgang Harnisch（hrsg.）, *Gleichnisse Jesu. Positionen der Auslegung von Adolf Jülicher bis zur Formgeschichte*, Darmstadt　1982

Herman Hendrichx, *The Parables of Jesus*, Harper & Row　1983

Hans Weder, *Die Gleichnisse Jesu als Metaphern*, Göttingen　1984

Martin Petzoldt, *Gleichnisse Jesu und christliche Dogmatik*, Göttingen　1984

Wolfgang Harnisch, *Die Gleichniserzählungen Jesu*, Göttingen 1985

Robert W.Funk, Bernard Brandon Scott, James R. Butts:

The Parables of Jesus. Red Letter Edition. The Jesus Seminar, California　1988

Robert Winterhalter with George W. Fisk, *Jesus' Parables. Finding Our God Within*,

Paulist Press　1993

William R. Herzog ll, *Parables as Subversive Speech*, Westminster / John Knox　　1994

Eduard Schweizer, *Jesus, das Gleichnis Gottes*, Göttingen 1996（1994）

３．解釈学的プロセス「歴史→文学→思想」、三重のミメーシス

芦名定道「宗教的認識と新しい存在」（京都哲学会『哲学研究』第 559 号、1993 年、pp.33-72）。

芦名定道「キリスト教信仰と宗教言語」（京都哲学会『哲学研究』第 568 号、1999 年、pp.44-76）。

（４）新しいイエス研究とパウロ研究

Ｍ・Ｊ・ボーグ『イエス・ルネサンス――現代アメリカのイエス研究』教文館、
1997 年（原著 1994 年）。

「歴史的イエスが、学問の世界でも、もっと広い世間一般の世界でも、「ニュースに」なっている。ここ一五年は、ことに北アメリカにおいて、学問領域としてのイエス研究が再び活発化するのが見られた。史的イエスの第三の探求が、一九世紀の古い探求や一九五〇年代後半と一九六〇年代初期の短い期間の「新しい探求」に取って代わって、現代進行中である。」（３）

サンダース、ホースレイ、バートン・マック、マーカス・Ｊ・ボーグ、
エリザベス・シュスラー・フィオレンツァ、ジョン・ドミニク・クロッサン
「聖書文学学会」（ＳＢＬ）の「史的イエス研究部会」（1983 年）、「イエス・セミナー」（1985 年）

↓

＜政治神学の射程＞

１．栗林輝夫「帝国論の中のイエスとパウロ――組織神学からのコメント」（日本基督教学会シンポジウム「イエスからパウロ？」、立教大学、2010/9/18）
・帝国論の新たな展開、アメリカ、神学、聖書学、宗教学、政治学などの諸分野
・アメリカの聖書学会（SBL）の「聖書と帝国」分科会（*The Bible and Empire* Unit）
パウロ・ルネサンス、イエスからパウロへ

２．現代思想におけるパウロ
古代の歴史的思想的文脈におけるパウロ
ユダヤ思想の文脈におけるパウロ
聖書学的議論（従来の閉鎖的な議論に対して）への新たなる問題提起

３．「政治神学へ向けたパウロ」あるいは「パウロから政治神学へ」
・スラヴォイ・ジジェク『脆弱なる絶対　キリスト教の遺産と資本主義の超克』青土社、2001 年。
・アラン・バディウ『聖パウロ　普遍主義の基礎』河出書房新社、2004 年。
・ジョルジョ・アガンベン『残りの時　パウロ講義』岩波書店、2005 年。
・ヤーコプ・タウベス『パウロの政治神学』岩波書店、2010 年。

４．宮田光雄『国家と宗教』岩波書店、2010年。

＜ Richard A. Horsley（ed.）＞

Paul and the Roman Imperial Order,
Trinity Press International, 2004.
Introduction（Richard A. Horsley）

＜参考文献１＞

１．トレルチ『歴史主義とその諸問題　上中下』（トレルチ著作集４～６）、ヨルダン社。
『歴史主義とその克服』理想社。
２．Ｃ・アントーニ『歴史主義』創文社。
３．Ｆ・マイネッケ『歴史主義の成立　上下』筑摩書房。

４．Ｋ・ホイシー『歴史主義の危機』イザラ書房。
５．Ｋ・ポパー『歴史主義の貧困』中央公論社。
６．カール・マンハイム『歴史主義・保守主義』恒星社厚生閣。
７．田中美知太郎編『歴史理論と歴史哲学』人文書院。
８．コリンウッド『歴史哲学の本質と目的』未来社。
９．リクール『歴史と物語　ⅠⅡⅢ』新曜社。
10．Ｅ・Ｈ・カー『歴史とは何か』岩波新書。
11．Ｇ・イッガース『ヨーロッパ歴史学の新潮流』晃洋書房。
12．Ｈ・Ｒ・ニーバー『啓示の意味』教文館。
H. Richard Niebuhr, *The Meaning of Revelation*, Macmillan, 1941.
13．大木英夫『新しい共同体の倫理学　基礎論　上下』教文館。
14．大林浩『アガペーと歴史的精神』日本基督教団出版局。
15．その他
カール・レーヴィット『歴史の意味』未来社。
ニスベット『歴史とメタファー　社会変化の諸相』紀伊國屋書店。
アルフレート・シュミット『歴史と構造　マルクス主義歴史認識論の諸問題』法政大学出版局。
ポール・ヴェーヌ『差異の目録　新しい歴史のために』法政大学出版局。
ドミニク・ラカプラ『歴史と批評』平凡社。
アーサー・Ｃ・ダント『物語としての歴史　歴史の分析哲学』国文社。

＜参考文献２＞

１．『聖書講座』（第一、二、三、四巻。特に今回の講義に関連しては、第一、四巻）日本基督教団出版局、1965 年。
２．Ｐ・シュトゥールマッハー『新約聖書解釈学』日本基督教団出版局。
３．出村彰・宮谷宣史編『聖書解釈の歴史　新約聖書から宗教改革まで』日本基督教団出版局、1986 年。
５．トレルチ「神学における歴史的方法と教義的方法について」、『トレルチ著作集２』ヨルダン社。
６．パネンベルク「救済の出来事と歴史」、『組織神学の根本問題』日本基督教団出版局。